

知的能力障害を伴う自閉スペクトラム症児に対する 協同ボール運び活動を促進する指導

Guidance of ball-carrying-activity in cooperation for autistic children

○岡 綾子・米山直樹

(関西学院大学大学院文学研究科) (関西学院大学文学部)

Ayako OKA, Naoki YONEYAMA.

(Graduate School of Humanities Kwansei Gakuin University)(School of Humanities Kwansei Gakuin University)

Key words: ball-carrying-activity, cooperation, autistic children

問題と目的 ASDのある人は協同活動が苦手なことが多いが、他者を刺激として行動を調整することは社会生活を送る上で重要である。本研究では、協同ボール運び活動の成立が難しい知的能力障害を伴う ASD 児 2 名に対して、大学の療育教室において言語や身体の支援による指導を行い活動の成立・維持を試みた。本研究を通し、知的能力障害を伴う ASD 児に協同活動を促進させる指導について検討した。

方法 <対象者> 4:6 の男児(以下、A 児)と 4:9 の女児(以下、B 児)の 2 名であった。A 児は広汎性発達障害の診断があった。3:4 で実施した新版 K 式検査 2001 は、P-M3:1, C-A2:6, L-S2:4 であった。体の動きがぎこちなく指先は不器用だが、体を動かすことを好んだ。B 児は自閉症の診断があった。4:1 で実施した新版 K 式検査 2001 は、P-M2:4, C-A3:3, L-S4:0 であった。体を協調させて動かすことは苦手だが、体を動かすことは嫌がらず取り組むことができた。

<標的行動> 対象児が刺激対象(支援者やボール、籠)に注目して籠を支援者に合わせて動かし、A4 サイズの籠に載せた直径 20cm のボールを運ぶことができる。

<研究デザイン> 支援者 1(筆者 1)と対象児の 5 往復の協同ボール運びを 1 セッションとした対象者間多層ベースラインデザインであった。

<手続き> ベースライン期は以下の通りであった。

- (1) 対象児がボールを一つ籠に入れる。
- (2) 対象児と支援者 1 が両手で籠の棒を持ち、立つ。
- (3) 支援者 1 の掛け声で歩き始める。
- (4) 支援者 1 は対象児に視線を向け、1 秒毎に「よいしょ」と言いながら 1 秒に約 25 センチの幅で歩く。
- (5) ゴールで、籠を傾けてボールを箱に入れる。
- (6) 支援者 1 の掛け声でスタートに向かって歩く。
- (7) (4)と同様に歩く。
- (8) (2)～(7)を 4 回繰り返す。

介入期には、大学院生(以下、支援者 2)が以下の支援を行った。

- (1) 対象児が刺激対象に注目していない場合は、「先生見て」の声掛けと指さしを行った。
- (2) 籠を運ぶテンポが合わない場合は、対象児の後ろから対象児の手に手をかぶせて籠の支え棒を持ち、支援者 1 の掛け声に合わせて籠を動かした。修正できた時点で支援を中止した。

ポストテスト期には、2 つのテストを行った。テスト 1 は「支援者 1 の掛け声なし」を 1 機会、テスト 2 は「支援者 1 の掛け声なし、片道毎に 1 回ランダムに 2 秒間静止」を 1 機会行った。指導期間を通して、片道毎に視線を刺激対象に向け、籠を平行にして運ぶことができた場合は、言語称賛を行った。

<評価> タイムサンプリング法により評価した。

Table1 協同ボール運び活動の評価基準

(視線)

正反応 対象児の顔と目が刺激対象に向いている

誤反応 対象児の顔と目が刺激対象に向いていない

(籠の平行)

正反応 籠の支え棒の 1 本が床の升目のラインと 2 本以上交わらない

誤反応 籠の支え棒の 1 本が床の升目のラインと 2 本以上交わる

結果 A 児 介入期初期には、籠の平行の回数はベースライン期に比べて格段に高くなった。介入期中期以降は協同ボール運び活動そのものが安定してできるようになった。ポストテスト期は介入期に続いてほぼ正反応で活動することができた。

B 児 介入期には、支援者 2 の声掛けに即時に反応して支援者 1 の顔を見るようになった。視線が刺激対象に向かわなくても、籠を運ぶテンポは支援者 1 と合わせられるようになった。様々なこだわり行動が出現したが、視線や籠の平行は高い正反応の回数を示した。テスト場面では、B 児はテスト 1・2 とともに無言で籠を運ぶ支援者 1 に対して活動の前半で何度も「よいしょして」と支援者 1 に声掛けを要求した。

考察 対象児 2 名は異なる変化を見せたが、それぞれ協同ボール運び活動を成立・維持させることができるようになった。支援者 2 の声かけや指差し、身体プロンプトにより対象児が協同活動に必要なポイントである刺激対象の注視や活動パターンの習得が推進されたと考えられ、注意を向ける場所や活動のパターンを指導することの有効性が示唆された。

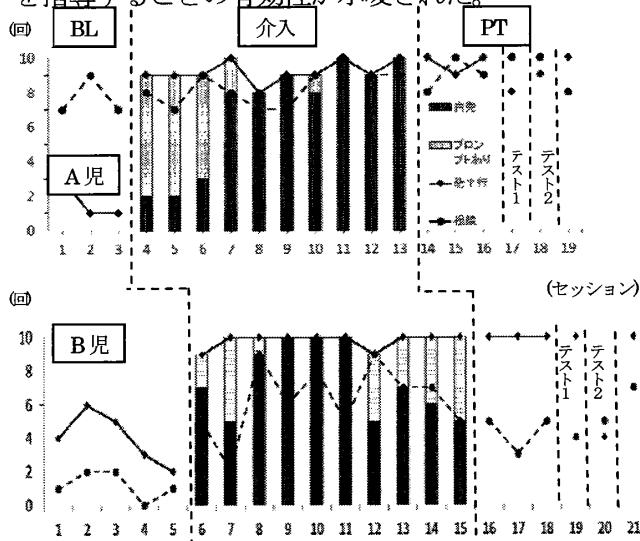


Fig.1 対象児の視線が刺激対象に向いていた回数と籠の平行の回数と介入期のプロンプトの有無